

## トピックス

## コムギ赤かび病の発生状況と防除のポイント

コムギ赤かび病は小麦の重要病害であり、病原菌がかび毒を産生するため、適切な防除が求められる。2024 年は発病圃場率が 31.6%と過去 6 年の平均値 (11.2%) を大きく上回った。倒伏防止・適期防除・適期収穫などを励行することで、赤かび病の発病抑制及びかび毒の低減ができる。

## コムギ赤かび病

コムギ赤かび病は、主にフザリウム属菌が穂に感染し、収量・品質の低下だけでなく、かび毒 (DON や NIV) を産生する小麦の重要病害である。感染時期は開花期～乳熟期であり、高温多湿の環境で発生しやすく、穂の褐変・サーモンピンクのかび・子実の萎縮・粒の変色などが見られる (写真)。厚生労働省は DON の基準値を超える小麦を流通させないように指導している。

## 県内の発生状況

2020～2025 年の病害虫防除所調査では、平均発病圃場率は 11.2%、平均発病穂率は 1.3%であった (表)。2024 年は発病圃場率が 31.6%と平均を上回り、平均発病穂率は 5.6%で一部圃場では 70%となるなど、多発年であった (表)。

表 コムギ赤かび病の発生状況 (病害虫防除所調査)

	2020	2021	2022	2023	2024	2025	平均
発病穂率 (%)	0	0	0	1.7	5.6	0.5	1.3
発病圃場率 (%)	0	0	0	29.5	31.6	6.3	11.2



写真 コムギ赤かび病穂の褐変、サーモンピンクのかびが見られる

2024 年の多発生の要因解析として、本病の防除薬剤で長年使用されているチオファネートメチル水和剤 (商品名: トップジン M 水和剤等) の耐性菌検定を実施した。結果、供試した 55 菌株中 1 菌株だけ培地上での感受性低下が確認されたことから、多発要因として耐性菌の影響は小さいと考えられた。次に、気象による要因解析を試みた。2024 年の麦類気象感応調査 (加西市、11 月 8 日播種) ではシ

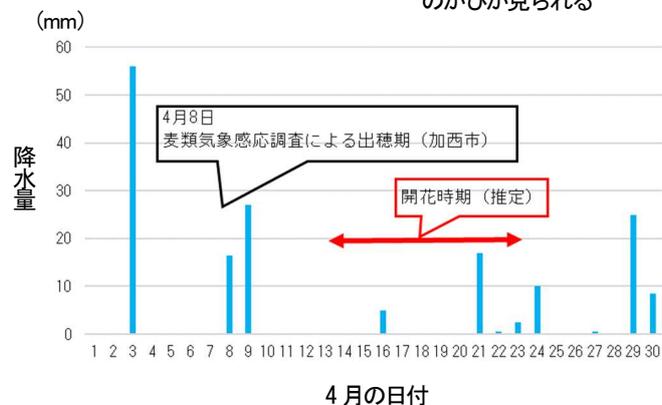


図 2024 年 4 月の降水量 (福崎アメダス)

ログネコムギの出穂期は 4 月 8 日であった。最寄りの福崎アメダスによると、4 月 16、21～24 日に降雨があり、開花期の適期防除期間が短かったことが多発生の一因と考えられた (図)。

## 赤かび病防除及び DON・NIV 濃度低減のポイント

- ・開花始期に薬剤散布を行う。降雨が断続的な場合であっても、散布後 30 分以上の晴れ間があれば防除効果は低減しにくいので、天気予報を確認し薬剤散布を行う。
- ・開花 20 日後頃の薬剤散布は DON・NIV 低減効果があるため、状況に応じ追加防除を行なう。
- ・耐性菌出現のリスクを考慮し、作用機構の異なる剤によるローテーション防除を行う。
- ・倒伏及び刈り遅れは DON・NIV 汚染リスクが高まるため、倒伏しないための適正な肥培管理及び適期収穫を行う。

村上 翼 (病害虫部)